

5人のキューバ人へのアメリカでの連帯行動報告会

星野弥生 (キューバ友好円卓会議事務局/通訳・翻訳家)

首都ワシントンで5日間行われた行動

9月19日、キューバ大使館で、アメリカに捕らわれている5人のキューバ人(キューバン・ファイブ)に連帯して6月にアメリカで行われた行動について、ロドリゲス大使とピースボートのスタッフであり私たちの同志でもある松村真澄さん(写真)が話す会がありました。

円卓会議からは二瓶さんと星野が参加。「講演会ではなく、親しい友人たちとの対話の会」という位置づけで、アフターにはキューバ料理とモヒートなどを楽しむ時間も用意されていました。

大使は「6月4日から11日の連帯週間に首都ワシントンで5日間にわたって行われた行動は質的にも量的にもこれまでを凌ぐものだった。30カ国から1000人の若者が参加し、当のアメリカで行動を起こしたことの意味は大きい。2日間ホワイトハウス、法務省に5000人がデモをし、5人に大義があることを訴えるロビイングを行った。ワシントンだけでなく、世界各地で400もの集会が催され、新聞には104の記事が乗り、44カ国でアメリカの大使館への抗議行動がなされた」と報告。「人道的な道理があるという認識が深まった」と評価しました。

松村さんはたくさんの写真により、4日~8日のワシントンでの行動に参加した経験を語ってくれました。世界一周の船旅を企画・実行しているNGOのピースボートではこれまで15回キューバを訪問しています。総勢10000人が訪れたことになります。

「強いイメージではない「Obama, give me five!」(オバマ、5人を返せ!)というスローガンを掲げた会議とデモに参加しました。30カ国からの知識人、弁護士、アクティビストなどが集いましたが、基地問題、人権問題と、さまざまな分野の活動家が来ていました。

プエルトリコで独立を訴え、25年間アメリカで獄中生活を送ったという活動家のラファエル・カンセル・ミランダ氏は『どんな国民でも自分たちの家族を守る責任・権利がある。キューバの5人のために私が闘っているのは、これが世界の中で認められるべき普遍的な闘いだからだ』と述べました。

フランスのイグナシオ・ラモネは「フィデルとの100時間」を著した「ルモンド」紙の編集長です。『1944年

6月6日はノルマンディー上陸作戦の行われた日で、ちょうど今日が70周年の日。オバマは『ナチスを英米が武力で押さえた。たくさんの人が殺されたことを名誉に思う』と述べたが、キューバを攻撃していることを考えるとこれは矛盾だ』と語っていました。

6月7日はカナダの連帯委員会が楽しそうにやっている自転車デモに参加しました。大学生、観光客に若い人たちがビラを渡して5人のことを伝え、600人が法務省までデモをしました。」

弱い国にとってキューバは希望

真澄さんは、さらにキューバとの関わりの中から感じてきたことを話してくれました。

「日本でキューバのことはなかなか伝えにくい。『連帯』ということばも古いです。想像力を使って人々が知る機会を作らなければ、と思います。USAID(アメリカ合衆国国際開発庁、United States Agency for International Development)が、4月にキューバの弱体化を図ってSNSを立ち上げたと言われましたが、アメリカの若者たちがこのSNSを使ってキューバの悪いイメージを植え付けています。ならばこちらもインターネットを駆使してつながることを考えたいです」

「パレスチナの若者に会った時、一番行きたい国はキューバだと言っていました。『弱い国にとってキューバは希望なんだ』と。キューバの現実をやっぱり伝えていかなければ。アメリカとキューバの子どもたちが仲良くしてほしい、とキューバの人たちは思っているのですから」

オバマ政権のほころびは、キューバに対する姿勢にも見られますね。世界のいろんなところから、「キューバ」を発信していくことの大切さを感じます。そして私たちの会がそうやって少しでも「キューバ」を伝えることに寄与できるよう願っています。

